

令和6年2月13日

令和6年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）
入学者選抜試験 陶芸

注意事項

- ・ 試験が終わるまで、携帯電話等の通信機器は電源を切って配布された封筒に入れておくこと。
- ・ 写真撮影等、一切の記録を禁止する。
- ・ トイレに行く際は、必ず受験票を携帯すること。
- ・ 与えられた問題用紙、草案用紙等は持ち帰らないこと。

令和6年2月13日

令和6年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）
入学者選抜試験 陶芸

本日の試験は、以下の時間割で行います。

■ 筆答試験 / 試験場（陶芸研究室）

10:00 ~ 11:15

◇ 昼食 / 試験場（陶芸研究室）

11:20 ~ 12:25

■ 実技試験 / 試験場（陶芸研究室）

実技問題1

12:30 ~ 14:00

実技問題2

14:20 ~ 15:20

令和6年2月13日

令和6年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）
入学者選抜試験 陶芸

筆答試験

（10：00～11：15）

問題 1

以下の文章が説明している語句を解答用紙に答えなさい。

[1] 白雲石とも呼ばれる炭酸カルシウムと炭酸マグネシウムを主成分とした複合炭酸塩で、主に釉薬や素地の媒溶剤として使われる。釉薬の貫入防止剤としても有効である。

[2] 主にロクロ成形した器物底面の削り作業で使われる筒状の道具で、器物の口縁をいためずに削り仕上げができるためよく使われる。半乾きの粘土で出来たものと素焼きしたものがあり、素焼きのものは浸水させてから使う。

[3] やきものを指す呼称として東日本の瀬戸物に対して西日本ではこの産地の名が使われた。室町時代末期にはすでに朝鮮半島の技術を導入して窯業が始められていたと考えられ、素朴で詫びた風合いから茶湯の道具としても好まれた。江戸時代は御用窯として藩の庇護を受けたが明治に入りそれを失い一時的に衰退したが、中里無庵を中心に桃山期の技法を復活させ復興させた。

[4] 本焼き焼成後、低火度で熔融する絵具を使い彩色して焼き付ける加飾技法。この技法で使う絵具はフリットなどの低火度で熔融する媒溶剤に着色剤として酸化金属などを加えて調合する。九谷や有田で主に使われる透明性のある盛絵具を和絵具といい、明治以降に主に洋食器生産に使われた不透明な平絵具を洋絵具という。

[5] 西アジア、中東で使われてきた釉薬で、ソーダ分の多いアルカリ釉に着色剤として酸化銅を加えて低火度酸化焼成によって得られる釉薬である。現在ではリチウム原料などを使い高火度焼成にも対応した釉薬も開発されている。

[6] 陶彫という造形ジャンルを初期に確立した作家の一人で、同世代の前衛陶芸作家に影響を与えた。1910年に鳥取に生まれ、1931年に上京し絵画を学んだがやがて彫刻制作を始める。日本美術院展に出品した木彫作品「千家元麿氏像」が平櫛田中に認められる。戦後、次第に抽象表現への関心を強めて様々な造形素材を試みる中で陶素材を使った抽象的陶彫作品を完成させた。国際的にも評価が高く1958年のベネチア・ビエンナーレに代表作となる「寒山」を発表した。

[7] 1886年、奈良に生まれ東京美術学校で建築と室内装飾を学び、英国留学ではアーツ・アンド・クラフツ運動に影響を受ける。バーナード・リーチとの出会いから陶芸の道に進み、自宅に窯を築き白磁の焼成に成功する。九谷の北出塔次郎の窯で色絵を研究し、戦後は京都を基盤に羊歯や定家葛などをモチーフとした連続文様を考案し、金銀彩を用いた色絵磁器の代表作を生み出した。1955年に重要無形文化財「色絵磁器」の保持者に認定される。

[8] 茶道具の一つで、茶碗を清めたり温めたりした湯水を受け止めるための器で、「こぼし」とも呼ばれる。形状は大脇差、差替、棒の先、槍の鞘、鉄盥、瓢箪、餌畚、などがある。室町時代までは台子皆具の一つであったため素材は金属類が主流であったが、桃山時代に入ると千利休を中心とした侘び茶の好みになかった木地製や陶磁製のものが登場した。

問題 2

以下に挙げた語句をそれぞれ説明しなさい。

[1] 登り窯

[2] 加守田章二

[3] 走泥社

[4] 萩焼

問題 3

以下に挙げられた図版の作品について、それぞれ説明しなさい。

[1]

8 灰釉獅子の香炉（狛犬）

(出典)

陶磁大系 第六卷

古瀬戸

発行 株式会社平凡社

[2]

43 花生

(出典)

生誕 100 年記念

ルーシー・リー展

発行 滋賀県立陶芸の森

[3]

鳴海織部手鉢

(出典)

角川 日本陶磁大辞典

発行 株式会社角川書店

P.1044

問題 4

「伝統」についての考察を、400字以内で述べなさい。

令和6年2月13日

令和6年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）

入学者選抜試験 陶芸

実技試験

実技問題1

12:30 ~ 14:00

実技問題2

14:20 ~ 15:20

実技問題1

与えられた粘土（8kg）を使って、条件に従い中空構造の立体を手びねりで制作しなさい。

条件

- (1) 立体は450mm角の板上に配置し、題名用紙（白紙シール）に題名を記入して立体正面の板上の右手前端に貼ること。
- (2) 立体は板からはみ出しているもよいが、板上に自立すること。
- (3) 焼成する事を前提に造形しなさい。
- (4) 粘土は全部使わなくてもよい。
- (5) 与えられたA4の紙は草案用紙として使ってよいが持ち帰らないこと。
- (6) 受験票は受験番号札の横に置くこと。
- (7) 用意された道具のみを使うこと。
- (8) 用意された道具は持ち帰らないこと。

実技問題 2

与えられた粘土（12kg）で、器物の内径と深さを計測するためのトンボを使い、トンボの寸法に合わせた器物を条件に従い出来るだけ多くロクロ引きしなさい。

条件

- (1) 高台を削ることを前提とすること。
- (2) トンボは赤色部分を下部として使用すること。
- (3) ロクロ引きした器物は、下げ板の上に接触しないように並べること。
- (4) 作品がいっぱいになった下げ板は、受験番号が貼ってある指定された場所に移動すること。
- (5) 受験票は受験番号札の横に置くこと。
- (6) 用意された道具のみを使うこと。
- (7) 用意された道具は持ち帰らないこと。